

# インターネット時代の音楽受容と動画サイトからの創造・発信

フェリス女学院大学音楽学部准教授

## 谷口 昭弘

音楽を楽しむ環境は、従来のレコードやCDから、インターネットに接続したパソコンを背景にしたものに移りつつある。この流れの中で、音楽を創造し発信する方法にも変化が現れてきた。この稿では、近年の音楽の聴取のあり方を概観し、近年新しい音楽を発信する拠点となっているニコニコ動画など、動画共有サイトが生み出す音楽創造について述べてみたい。

### パッケージ型メディアからダウンロード型へ

そもそも日本では1999年12月にソニー・ミュージック・メディアが開始したdimusic（ビットミュージック）というサービスがきっかけとなり、パソコン使用を前提としたダウンロード型の音楽販売が始まった。これは「パッケージ型」と呼ばれる音楽販売のあり

方とは違う方向性を提示した契機だった。パッケージ型メディアとは、レコードやCDなどに代表される旧来型メディアだ。いずれも持ち運びする媒体に納められ、目に見える形で音楽が提供される。音楽を聴くメディアが「モノ」として残り、それを所有しているという感覚が強い。その「モノ」には本の表紙にあたるジャケットや専門家が解説するライナーノーツ、歌詞カードも含まれる。

近年は「AKB48商法」と呼ばれるような、握手券やCD店内で行われる芸能人やアーティストなどの「インスタイベント」への参加資格を与えるクーポンのようなものがあつたりと、様々なサービスへ誘導するパッケージ付商品も登場している。

ダウンロード型の場合にはパッケージ型とは違う魅力がある。まず店舗に出向かずとも、

インターネットにパソコンが繋がってれば、24時間いつでも音楽が入手できる。またブックレットやケースなどが付属しないためかさばらず、小さなスペースに膨大な音楽データを置くことができる。近年はダウンロード音源の価格をCDよりも安く設定することにより、ダウンロード型に向かう人も増えている。また都市部の大型店に赴かなければみつかからないようなアーティストの音楽が容易に入手できたり、選択の幅が広がるという特徴もある。

最近はCDを買っても専用のプレイヤーでは聞かず、iPhoneやiPadなどの携帯音楽プレイヤーに入れて音楽を持ち歩く人も多い。それだっただけにこれらの携帯型プレイヤーに特化したファイルを最初から入手した方が手間が省けるといふものだ。

## ダウンロード型からストリーミング型へ

しかしダウンロード型は、ファイルを一旦完全な形でパソコンに取り込んでから音楽を聴く。そのためダウンロードが行われている間は、パソコンの前で待ち続けることになる。しかしストリーミングは音のファイルをパソコンに取り込みながら再生するので、インターネットの通信環境が安定していれば素早く音楽を楽しむことができる。いわばネットを使ったラジオ放送のようなものだ。事実、NHKによる「らじる★らじる」など、既存の放送局がストリーミング型音楽配信を行うようにもなっている。

ただストリーミング型サービスで音楽に影響力を持つようになったのはマスコミだけではない。誰でも自分の映像や音楽を自由に投稿できる動画共有サイトが大きな影響力を持つようになった。有名な動画サイトYouTubeは、もともとパーティーのビデオを友人に配る方法として技術開発が行われていたものがあるが、1981年のMTV誕生以来、音楽宣伝の手段としてプロモーション・ビデオが当たり前となった昨今、音楽の動画が投稿されるのも自然な流れだった。2011年の時点で動画共有サイトは日本人の約7割が利用しており、もはや社会に必要なインフラとも

呼べるものにまで発展した<sup>(注1)</sup>。

このような動画共有サイトは、片手間に音楽を楽しむアマチュアによるパソコン上で作られた新しい楽曲を発表する場として機能している。パソコン上で行われる音楽制作という、MIDIでシンセサイザー音源をコントロールし、新しい楽曲や既成曲を耳コピーして紹介するDTM(デスクトップミュージック)が1990年代に流行した。しかしMIDIというのは楽器をコントロールする機能しか持っていないためDTM作品はインストウルメンタル・ナンバーが基本で、歌は入っていないかった。またパソコン上に現れるのは音を操作する画面くらいで、見た目が無機質だった。そのためDTMは一部音楽ファンの間で盛り上がりつつも、一般に広く広がっていくまでには達しなかった。

このDTMの風景は2000年台に大きく変わった。その背景には人間の声をパソコン上で扱うヴォーカロイドの出現があった。ヴォーカロイド(以下ボカロ)とは、ヤマハが開発した歌声を合成できる音声技術で、これを行うソフトウェアも普及するようになった。音符と歌詞を入力すると、ソフトがそれを歌声に変換するのである。かつて自作の歌を発表するには、自分で歌うか、歌い手自分で探さねばならなかった。そのための費

用もかかったし、録音場所の確保も大変だった。ボカロは無論代替物だが作品発表のハードルを大きく下げるのに貢献したといえる。

このボカロの中で有名になった初音ミクというソフトは、パソコン上で歌を歌うバーチャル・シンガーであるとともにバーチャル・アイドルでもある。イラストレーターのKEIによるデザインは青緑の髪をツインテールに結んだもので、公式プロフィールには16歳という年齢や、身長・体重も設定されている。ここからイラストやアニメーションなど、ファンによる二次創作が生まれた。

## ニコニコ動画とボカロブーム

そしてボカロ・ブームの火付け役となったのは、インターネットの動画共有サイトだった。特に日本では2007年頃からニコニコ動画(以下「ニコ動」というサイトを中心に、初音ミクなどを使った楽曲が次々と投稿されるようになった。その盛り上げに一役買ったのはニコ動のコメント機能だ。投稿された動画に他のユーザーがコメントを投稿するものである。YouTubeにもコメント機能はあるが、それは画面の下に、掲示板やブログのコメントのように表示されるものだった。ニコ動のコメントは投稿動画の上に右から左へ流れるような形で、曲の特定の部分に付けるこ



▲写真1：ニコニコ動画に投稿されている《みくみくにしてあげる》

とができる。この動画上のコメントは、あたかもテレビを見ながら声を出している感覚に似た臨場感のある見え方になっている。動画のどの部分が面白いのかがよく分かるし、多数のコメントが投稿されると、画面がそのコメントでぎっしり埋まる（これを「弾幕」という）。

例えば、初音ミクの代表曲《みくみくにし

てあげる》の場合、タイトルとなっているサビの歌詞が歌われると「みくみくにしてあげる」というコメントが「弾幕」になり、これを見たニコ動ユーザーは、あたかもライブ会場でステージ上の歌い手に向けて、皆で声を張り上げているように錯覚する。実際には別々に付けられたコメントだが、同時に発せられているように見えるのである。このヴァーチャルな臨場感が、他の動画サイトにはないニコ動の面白さだ。

そのほかにもニコ動の各会員が好きな動画をブックマークする「マイリスト」という機能があり、何人のマイリストに曲が登録されたかというのは動画の人気具合を示すバロメーターとなる。この「マイリスト数」によって動画投稿者たちは視聴者の反応を確認し、それが新曲を発表する動機となる。

さらにニコ動には作曲・動画制作者たちを支援する「クリエイター奨励プログラム」がある。これは動画の人気度、動画から生まれた派生作品（元動画にインスピレーションを受けたキャラクターや小説等）の数や人気度も応じて「スコア」というポイントが付くもので、貯まったスコアは現金化できる。経済的対価を目指して書くクリエイターも、このプログラムによって生まれている。



▲写真2：ボカロの初音ミクによって広まった人気曲のガイドブック

## ニコ動のボカロ曲からの展開

ここまで述べたような様々な仕掛けにより、ニコ動は音楽の発表の場となり大きな影響力を持つようになった。そしてボカロのオリジナル曲の中には、カラオケ配信されるものまで出てくるようになる。例えば黒うさPというクリエイターによる《千本桜》は総合カラオケランキングで2012年度、2013年度、2014年度と3年連続で第3位を獲得した。もともとボカロだけが歌うことを念頭においていたのか、決して歌いやすい曲ではないが、コスプレやライブも盛んになり、ゲーム業界にも影響を広げ、曲をモデルにしたミュージカル『音楽劇「千本桜」』も作られ、AKB48のメンバーが出演している。さらにボカロ楽曲にもとづいた小説も発行されている。



▲写真3：ボカロ小説を紹介するホームページ

る。その最初の例は2010年に刊行された、『悪ノPというクリエイター』による『悪の娘』である。ボカロ小説の読者は、中学生・高校生を対象にした「萌え絵」のイラストの入ったライトノベルの読者層とも重なっている。

### ニコ動発信の音楽創造の今後

古くからニコ動でボカロに親しんで来た人からみると、ボカロ・シーンにも時代的な変化があるという。初期はかなり自由な雰囲気、投稿される音楽も作風の幅が広がった。

しかしボカロによる音楽がジャンルとして確立されるに従い、求められるものが固定したり、商業的に成功するスタイルを模索する流れになってきた<sup>(注2)</sup>。

そもそもボカロは自作を歌う人がいないから機械に歌わせるものだったし、それを逆手に取って、人が歌えないキーやテンポの曲をあえてボカロに歌わせるといふことも行われた。また初音ミクの場合にはアニメのようなキャラ的な魅

力があり、歌い方も、機械っぽさが一つの特徴とされた。

しかし徐々にボカロ曲を作る作曲家も生の人声の魅力に気付いたり、商業的成功を経て歌ってもらえるようになり、ボカロから離れていくことも多いという。そのような流れの中で、ボカロもかつてほどの勢いがなくなっているのが多くの人たちの共通認識だ。しかし新しい声のボカロも開発され、しばらくは様々な作品が投稿されていく状況が続いていくようではある。

### 〔注〕

- 注1 日本レコード協会 「『動画サイトの利用実態調査検討委員会』報告書公表」国民の70%が動画サイトを利用、音楽ファイル違法ダウンロード年間12億」 <http://www.rriaj.or.jp/release/2011/pr110808.html>
- 注2 『ボカロPの中の人』の中の人編『ボカロPの中の人』PHP出版、2015年。